

(様式3号)

## 学位論文の要旨

氏名 久野 高博

### 〔題名〕

口腔扁平上皮癌の浸潤先端部におけるRunx-Related Transcription Factor-1過剰発現とリンパ節転移および予後不良との関連性について

### 〔要旨〕

本研究の目的は、口腔扁平上皮癌（OSCC）におけるRunx-Related Transcription Factor-1（RUNX1）の臨床的意義を検索することである。OSCC患者43人において免疫組織化学染色によってRUNX1の発現を解析した。RUNX1発現の臨床的意義は、カイニ乗検定、カプランマイヤー法、Cox比例ハザードモデルによって評価した。浸潤先端部におけるRUNX1の発現は、腫瘍中央部での発現よりも有意に高かった（ $P < 0.01$ ）。浸潤先端部で高いRUNX1標識指数（LI）を有するOSCC患者は、低いLIを有するOSCC患者と比較して、有意に生存期間が短かった（ $P < 0.05$ ）。浸潤先端部での高いRUNX1-LIの患者の予後不良は、低分化（ $P < 0.05$ ）、浸潤様式（ $P < 0.01$ ）、およびリンパ節転移（ $P < 0.05$ ）と統計的に相関していた。さらに、浸潤先端部での高いRUNX1-LIは、全生存期間に対する独立した予後因子であることが実証された（ $P < 0.01$ ）。我々の検索結果から、OSCCの浸潤先端部におけるRUNX1の過剰発現は、予後不良の有用な予測因子であると同時に、リンパ節転移を評価するのに有用なマーカーであり得ることが示唆された。

### 作成要領

1. 要旨は、800字以内で、1枚でまとめること。
2. 題名は、和訳を括弧書きで記載すること。

## 学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 <b>1536</b> 号	氏 名	久野 高博
論文審査担当者	主査教授	山崎 隆弘	
	副査教授	池田 栄二	
	副査教授	三島 克章	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
口腔扁平上皮癌の浸潤先端部における Runt-Related Transcription Factor-1 過剰発現とリンパ節転移および予後不良との関連性について			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
Overexpression of Runt-Related Transcription Factor-1 at Invasive Front in Oral Squamous Cell Carcinoma is Associated with Lymph Node Metastasis and Poor Prognosis			
(口腔扁平上皮癌の浸潤先端部における Runt-Related Transcription Factor-1 過剰発現はリンパ節転移と予後不良に関連する)			
掲載雑誌名 The Bulletin of the Yamaguchi Medical School			
第 66 巻 第 1-2 号 ( 2019 年 6 月 掲載・ <u>掲載予定</u> )			
(論文審査の要旨)			
<p>本研究の目的は、口腔扁平上皮癌 (OSCC) における Runt-Related Transcription Factor-1 (RUNX1) の臨床的意義を検索することである。当科にて術前・術後化学療法を行わずに、外科的切除術のみで加療を行った舌癌 (OSCC) 患者 43 名の手術材料を対象として、免疫組織化学染色によって RUNX1 発現を解析した。RUNX1 発現の臨床的意義は、カイ二乗検定、カプランマイヤー法、Cox 比例ハザードモデルによって評価した。まず、RUNX1 染色を陽性と判断する基準として、Intensity1, 2, 3、すなわち RUNX1 の染色をすべて陽性とする場合、Intensity2, 3、すなわちリンパ球の染色と同等以上の染色を陽性とする場合、Intensity3、すなわちリンパ球の染色よりも強い染色を陽性とする場合の 3 つを設定した。その結果、何れの基準においても浸潤先端部における RUNX1 の発現は、腫瘍中央部での発現よりも有意に高かった (<math>p &lt; 0.01</math>)。また、浸潤先端部において Intensity3 を RUNX1 陽性として評価した場合にのみ、RUNX1 の高発現群と低発現群の間に生存期間で有意差を認めた (<math>p &lt; 0.05</math>)。さらに、生存期間を短くする要因として 低分化 (<math>p &lt; 0.05</math>)、浸潤様式 (<math>p &lt; 0.01</math>)、およびリンパ節転移 (<math>p &lt; 0.05</math>) が関連していた。なお、浸潤先端部での RUNX1 の高発現は、全生存期間に対する有用な予後因子である可能性が示唆された (<math>p &lt; 0.01</math>)。興味深いことに、浸潤癌に隣接した上皮内腫瘍においても RUNX1 の高発現が観察された。</p> <p>本研究の結果、OSCC の浸潤先端部における RUNX1 の過剰発現は、予後不良の有用な予測因子であると同時に、リンパ節転移を評価するのに有用なマーカーであり得ることが示唆された。よって、学位論文として価値のあるものと認めた。</p>			
備考 審査の要旨は 800 字以内とすること。			